

# エドアルド・キヨソーネに就て (一)

隈元謙次郎

## 一

工部美術學校に招聘されたるアントニオ・フォンタネージ Antonio Fontanesi ヴィンチエンツォ・ラグーザ Vincenzo Ragusa 及びカッパレッチ V. G. Cappiellini に先立つて來朝し、明治三十一年其の逝去に至る迄日本を離れず、最も長く滞留した者をエドアルド・キヨソーネ Edoardo Chiosso とする。彼は明治八年一月大藏省紙幣寮(後の内閣印刷局)の招聘に依り來朝し、當時印刷技術未熟の爲其の製作を海外に委ねてゐた吾が各種の紙幣製作の重任を負ひ、其の原型彫鑿に刀を揮ひ、印刷に盡瘁して是を完成すると共に、後繼技術家の薫育指導に努力し、遂に政府所期の目的を達した。加之、キヨソーネは其の卓拔なる技術を以て、畏くも 明治天皇並びに東宮時代の 大正天皇の御尊影を謹寫し奉りしをはじめ有栖川宮幟仁親王殿下、同幟仁親王殿下、北白川能久親王殿下の御肖像を寫し參らせ、又多くの明

エドアルド・キヨソーネに就て

治元勳・功臣の肖像を描き、長く是等の人々の勳功を傳へてゐる。茲に少しくキヨソーネの業績に就き記載したいと思ふ。

エドアルド・キヨソーネは、西紀一八三二年(天保三年)一月二十一日(註一)伊太利亞ジェノヴァ市近郊の海濱の小邑アレンツァノ Arzenano (註二)に生れた。彼は其の初等教育を當時ジェノヴァに於て著名なベツシーニ Pessini の學校で受けた。

天性意匠・圖案に興味を持つた彼は、一八四七年(弘化四年)十五歳にしてジェノヴァのアツカデミア・リグステイカ・デイ・ベルレ・アルテイ Accademia Ligustica di Belle Arti に入學した。按ずるに、夙に彼の従兄ドメニコ・キヨソーネ(註三)が、フィレンツェに於て印刷彫刻の學校を設け、名を贏ち得てゐたことも、彼が此處に入學する大きな動機となつたものと思はれる。彼はアツカデミア・リグステイカに於て、著名なる教授ラツファエレ・グラナラの薫陶を受け、目覺しい進歩を遂げた(註四)。即ち、既に一八五二年(嘉永五年)二十歳の若冠を以て、「アツカデミア・フィオレンティナ名畫撰集」Galleria

scelta dell' Accad. Fiorentina の如きを鑄刻して版に附し、ペルフェッティ Ant. Perfetti をして刊行せしめしを始め、一八五五年には聖マルコ寺の壁畫を雕刻し版に附した(註五)。

更に、キョソーネがデエノヴァ時代既に銅版彫刻家として名を成してゐたことは、彼が其の師グ

ラナラの工房に於て製作せる

「ヂオットとチマブーエ」Gi-

otto e Cimabue をはじめ、

「苦惱の慰安者聖母 マリア」

Madonna Consolatrix Afflict-

orum 「麴包と涙」 Pane e La-

crime 或は「アレツサンドロ・

デ・メデイチの最後」La Fine

di Alessandro De-Medici の

如き作品が示すところである。

是等の作品は、今日羅馬國民

美術館に收藏されしをはじめ、

彼の郷國に於て廣く市民の邸宅を飾つてゐる。殊に、前三者は吾國に於ても内閣印刷局及び諸家の收藏するところである。

而して、キョソーネは一八六七年(慶應三年)巴里に於て萬國博覽

會開催さるるに際し、其の作品を出陳し、銀牌を贏ち得た。斯くて、

彼の名は漸く高く、一八六九年(明治二年)にはミラノのアツカデミ

アの會員に推舉された。時に齡三十七歳である(註六)。

是より嚮、キョソーネは、豫て其の愛好する藝術即ち銅版、石版或は寫眞術を紙幣、公債證書等の製作に應用せば、美術的作品を得ると共に、偽造防止に必ず好結果を得ることを豫見してゐた。これは、凡

そ一八六七年(慶應三年)の

頃である。斯かる意見は、當

時伊太利亞國立銀行に於て

も、擡頭し來つたところであ

つた。纏て、伊太利亞政府は、

紙幣改造を企圖し、其の製作

を獨逸國フランクフルト市の

ドンドルフ會社 Dondorf に

委嘱した。當時、國立銀行に

在職せるキョソーネも亦、フ

ランクフルトに赴き、ドンド

ルフ會社の工場に働くことと

なつた(註七)。而して、今キ

第一圖 キョソーネと得能良介

ョソーネの獨逸へ赴ける年月日及び其の事情に就きては不詳であるが、伊太利亞國立銀行とドンドルフ會社との契約書に依れば、此の間の事情を暗示するものがある。即ち

伊太利亞國ノバンクナヌスユナリ(マ) 政府ニテ關スル 金札出版ノ方ヲ變革シ則

學問ト美術ヲ基本トシテ金札廣造不相成様工夫ヲ以新金札ヲ出版セ

シムル見込ニテドンドルフ氏リスト氏ハフランクフルトニテ出版所ヲ關涉スル者ニ掛合新金札ヲ出版スル爲出版仕方ヲ發明シ右發明シタル製造方ヲ知ラセ伊太利國術者其外附屬ノモノニ傳授シフロレンツ府ニテ新出版所ヲ取建ル儀ニツキ世話致シ吳ヘシ(註八)と記さる。是に據つて考ふるに、キョソーネも亦、是等の技術を修得する爲に伊太利亞國立銀行より派遣されしものとも考へらる。

而して、次に説く如く、明治初年吾が政府が紙幣の改造を企て、新紙幣の製造を同じくドンドルフ會社に委託せる時に當り、恰も、同社に在つたキョソーネは是等の日本の新紙幣製造に従ひ、其の技術を發揮したのであつた。茲にキョソーネの吾が國へ招聘さるるに至つた機縁が胚胎する。

(註一) 東京市青山外人墓地所在のキョソーネ墓誌銘には、一八三三年誕生(註記)あり。茲には Accademia Ligustica di Belle Arti: Catalogo del Museo Chiassone, 1926 に據る。

(註二) チェノヴァ市の北二十一軒ヂェノヴァ灣に面した入江の邑であつて、氣候溫和、植物繁茂し、靜かな海水浴場として知らる。

(註三) Domenico Chiassone 凡一八一〇年頃ヂェノヴァに生る。著名なる銅版彫刻家にして、古名畫の複製銅版畫あり。

(註四) Catalogo del Museo Chiassone に據る。ラツファエレ・グラナラ Raffaele Granara は著名なる銅版彫刻家、一八三六年ヂェノヴァのアツカデミアの教授となる。

(註五) U. Thieme u. F. Becker: Allgemeine Lexikon der Bilden-

エドアルド・キョソーネに就て

den Künstler に據る。

(註六) 同右。

(註七) Catalogo del Museo Chiassone 及び「得能良介君傳」(大正十年刊、田數八發行)に據る。

(註八) 法規分類大全第一編(明治二十四年刊、内閣記録局編輯)。

## 二

明治維新の鴻業成るや、政府は先づ以て財政・經濟の改革統一に努め、明治元年四月太政官札を製造し、是に關する事務は會計官の管掌とし、製作に就ては全て京都の銅版彫刻家松田敦朝(註一)に命じた。而して、翌二年八月松田敦朝に東上を命じ、民部省札及爲換座三井組の證券を製作せしめた。

然るに、大藏省は大政官札並に民部省札の紙質粗惡にして彫鑄・印刷精巧ならざる爲贗模の弊尠からぬを憂へ、明治三年六月更に精緻なる紙幣を製作して、悉く舊紙幣と交換せんことを正院に稟議して其の許可を得た。茲に於て、同年十月大藏省は特例辨務使上野景範(註二)をして、獨逸國フランクフルトなるドンドルフ會社へ新紙幣五千萬圓の製作を委託せしめた。更に越へて四年七月、廢藩置縣の舉あるや、政府は複雑なる藩札を整理し、全國の通貨の統一を決し、翌五年九月是等と交換すべき新紙幣五千萬圓の増製をドンドルフ會社へ委託した。キョソーネがドンドルフ會社に在職して、その彫鑄に従つたのは即ち

是等の吾が新紙幣である（註三）。

而して、此の新紙幣は所謂日耳曼紙幣と稱さるるものであり、其の圖様は、表面には菊花章を戴ける鳳凰を描き、下に雙龍を配せるものである。

是より嚮、明治四年七月政府は大藏省内に紙幣司（同年八月紙幣寮と改稱）を置き、紙幣、公債證書類の發行の順序或は紙幣流通の狀況を調査し、新舊紙幣交換の事務を遂行せしめた。而して、爾後明治七年十月に至る期間に於ては、郵便切手、蠶種印紙等の製作は猶松田敦朝、梅村翠山（註四）等をして請負はしめた。

然るに、明治七年一月司法少丞得能良介（註五）紙幣頭に任せらるるに及び、彼は紙幣、公債證書、諸印紙の製造を外國に委託するの不見識と莫大なる費用の徒費を痛感し、獨逸より機械類を購入し、著名なる技師を招聘して製造一切の事を紙幣寮に於て擔當し、併せて後進技師家を養成すべきことを正院に稟申した。即ち、

大藏省伺 七年三月十四日

皇國從來の楮幣其製疎惡ニシテ質模ノ弊患不少候ニ付新紙幣及ヒ記名利札兩證書並銀行紙幣ノ各種ハ既ニ歐米ノ製造ヲ仰キ何レモ精美ヲ極メ候ヘ共新舊公債證書諸印紙ノ類ニ至リ候テハ御國製ニ付其陋拙ヲ難免候間何レモ改正不相成候テハ不相叶且銀行紙幣記名證書等モ増造不仕候テハ不相成殊ニ海外ノ製造ヲ仰キ候テハ其費用莫大ノ儀ニ付今般日耳曼國ニテ別紙内譯ノ通紙幣製造機械一式御買揚並彫刻師等傭入前文紙幣類御國ニテ製造仕度尤歐米各國紙幣類製造ハ蒸氣機械相用候ハ一般ノ趣ニ付右機械相用候ヘハ人力ヲ省キ製造ノ神速ナルハ申迄モ無之旁前文ノ通機械買揚彫刻師傭入精

美ノ紙幣類製造ノ運ニ取計申度右彫刻師ノ儀ハ有名ノ巧手ニテ新紙幣原版ハ同人ノ手刻ニ有之同人傭上ノ上ハ彫鑄ノ技術傳習爲致將來御國ニテ充分精工ノ紙幣製造出來仕度萬一同人差支候節ハ別ニ技術練熟ノ者傭入候様可仕別紙相副此段相伺候也

（別紙）

一 タイルシヤール機械

一個

英貨バウンドシルリング

一〇〇二・〇〇〇

是ハ筋引ニ用フ

一 パンドグラフ機械

一個

二〇四・〇〇〇

是ハ筋及ヒ紋形ヲ製スルニ用フ

（中略）

一 製版工

一人

九〇・〇〇〇

一 押印職工

二人

五〇・〇〇〇

（後略）（註六）

此の上申に對しては、七年三月二十九日付を以て「伺の趣聞屆候條外國人傭入約定ノ儀ハ追テ可伺出事」と指令された。右上申文中「右彫刻師ノ儀ハ有名ナル巧手ニテ新紙幣原版ハ同人ノ手刻ニ有之云々」とあるは、前後の事情より吾がキヨソーネなることが推定される。而して、外國技師の招聘及び機械の購入のことは、既に第二回注文の新紙幣完成前後即ち明治六年十月頃より豫備交渉に入り、上述の如く、得能良介の上申に依り、七年三月に至つて政府は先づ機械購入の事を正式に允許し、續いて彫刻師等招聘の事を決したものである（註七）。斯くて、一時ドンドルフ會社を退き、更に技術研究の爲英京倫敦に在つたキヨソーネは、フランクフルト滯在中親交のあつた駐獨日本全

權公使より日本招聘の正式の交渉を受けた。茲に於て、彼は是を快諾し、其の招聘は決定した(註八)。

キョソーネは來朝に先立ち、一度デノヴァに歸り、家族、知友に別離を告げた。彼の義兄にして當時著名なる考古學者ジャン・バツテイスタ・ヴィルラ G. B. Villa に依て開催された送別の宴は、家族及び彼の親しき藝術家を加へ、遠く東洋へ旅立つキョソーネの前途を祝福したのであつた。即ち、明治七年(一八七四年)の晩秋或は初冬である(註九)。

而して、キョソーネと共に招聘された者にドンドルフ會社に在つて印刷の技術を擔當せる銅版摺師カール・アントン・ブリュック(註十)と活版摺師ブルノ・リイベルス(註十一)があつた。

(註一) 京都の銅版彫刻家玄々堂松田保居の子。號綠山。彼は夙く「聖蹟圖志」を彫刻し、又水戸、高槻、加納等の藩札を製作す。明治初年政府に用ひらるるや、英國より銅版機械を購入し、銅版彫刻術を一新した。彼が東京に設立した銅版、石版工場玄々堂は、當時の著名な洋風畫家を收容してゐた。明治三十六年十月廿一日歿。

(註二) 當時の大藏大丞。弘化元年鹿兒島に生る。明治元年外國事務御用掛を拜命、諸官を経て屢次辨務使、全權公使として歐米に在勤す。十八年元老院議官に擧げられ、明治廿年四月歿。

(註三) 「印刷局沿革録」、「得能良介君傳」、「明治財政史」(大正十五年昭和三年刊)に據る。

(註四) 天保十八年上總國武射郡南蓮沼に生る。本名亥之吉。初め木版彫

エドアルド・キョソーネに就て

刻を學び、後銅版彫刻を志し、遂に一家を成す。諸藩の藩札を製作す。

明治初年京橋區銀座に「彫刻會社」を創立し、石版彫刻師オットマン・スモリツク及び同印刷師チャールス・ポラールドを招聘し、吾國石版印刷術の發達に寄與するところ大であつた。彼の門に師事せる者に打田新太郎、三間竹山、小柴英等がある。明治三十九年六月東京に歿す。

(註五) 文政八年十一月九日鹿兒島に生る。幕末・維新に際し、西郷隆盛、大久保利通、吉井友實等と共に國事に奔走す。維新後大藏大丞、司法少丞を経て紙幣頭に擧げられ、後印刷局長となる。明治十六年十二月二十七日逝去す。

(註六) 法規分類大全第一編に據る。

(註七) 「得能良介君傳」に據る。

(註八) Catalogo del Museo Chiossone に據る。

(註九) Catalogo del Museo Chiossone は一八七二年(明治五年)とすれども、一八七四年(明治七年)なるべし。

(註十) Karl Anton Brück 明治七年十二月二十一日東京に來著。十三年十一月在職中病歿す。凹版印刷術を擔當指導す。

(註十一) Bruno Liebersブリュックと同日來朝。専ら凸版印刷術を擔當し、是を指導す。明治十年十二月満期解雇となる。

### 三

斯くて、キョソーネは明治八年(一八七五年)一月十二日横濱に來著し、同十四日入京した(註一)。此の時齡四十三歳である(註二)。印刷局沿革録(註三)に

刷局沿革録(註三)に

八年一月十四日 伊國熱那美術大學校名譽員エドアルド・キヨソネヲ彫刻師トシテ雇入ル同人ノ職ニ就クヤ圖案及版面ノ彫刻法ヲ一新シ又電胎及整版等諸版ノ計畫ヲ爲シ大ニ業務ヲ改善スルヲ得タリ

と記載されてゐる。而して、同年五月五日正式に契約を完了した。即ち、契約期限は其の第一期を同年一月十四日より十一月十三日迄の三箇年とし、給料は初め月額四百五拾四圓七拾壹錢八厘、外に住宅を貸與し、往復の旅費は一等船賃を給することとした。然し、此の契約期限は屢次雇繼を反復し、明治二十四年七月に至り、其の給料も明治十四・五年には月額七百參拾圓となり、二十年以後は五百圓となつた（註四）。

而して、紙幣寮に於けるキヨソネの最初の業績として擧ぐべきは、地券狀、煙草鑑札、同角印紙拾錢以下四種の原版の製作であつて、明治八年十月十三日完成した。是等は圖案、彫刻共にキヨソネの製作に成るものであり、吾が國に於ける凸版印刷の嚆矢である。而して、彼は是等の製作以外に、此の年四月、クラツチュ術及電胎法に依つて一面の原版より自由多數の版面を孳殖する方法を教授し、此の法を實施せしめた。從來の手法に依れば、所要の版面は夫々手刻し、従つて個々差異を生じ、而も時間と努力とを要すること莫大であつたが、茲に此の弊を根本的に改革するに至つた。

而して、此の年十二月、豫て伊太利亞全權公使より紙幣寮に委囑せるシーボルトの肖像石版畫を製作した。但しその印刷は石版印刷師チヤールス・ポラールド（註五）の手に成る。

明治九年二月、政府豫ての計畫に基き製作中の改正郵便切手拾五錢以下八種の原版が完成した。其の圖案意匠に就ては、猶疑問が存するが、彫刻はキヨソネの手に成つたもので、從來の凹版を新式凸版に改めた（註六）。此の年五月、キヨソネは職工を指導して紙漉簀の製造方法を傳へた。即ち吾が國に於ける漉入模様紙の製造は彼に依つて傳へられたものである。

なほ此の年の製作に成る作品に、「大久保利通像」（コンテ畫）、「西郷從道像」（同）及び「ラルストン像」（石版畫）がある。

明治十年一月、政府は紙幣寮を廢し、是に代つて紙幣局を設置し、紙幣頭得能良介を大藏大書記官に任じ、紙幣局長とした。而して、明治九年國立銀行條例の改正に依り、國立銀行紙幣製造の必要を生じ、十年四月製造に著手したが、九月に至り其の壹圓原版が完成した。是は、吾が邦に於いてキヨソネの製作せる最初の紙幣である。表面中央の上部に菊花章を畫き、右方に軍艦上の海軍水兵を配し、裏面中央には蛭子神（惠比須）を畫けるものである。而して、此の紙幣製造にあたりては、その完成を急ぎし爲、蛭子神像の彫鑿は、彼の知友にして工部美術學校彫刻學科教師たりしヴェインチェンツォ・ラグーザの手に成つたものと傳へられる（註七）。

此の年十一月十七日畏くも 明治天皇は聖駕を紙幣局に進め給ふた。供奉の人々には徳大寺宮内卿、杉宮内少輔等宮内省百官があり、來會の人々には有栖川二品宮、東伏見二品宮、閑院宮、三條太政大臣、岩倉右大臣、大久保内務卿等の文武顯官があつた。此の日著御の後、忝

くもキヨソーネは局長得能良介等と共に拜謁仰付けられ、大和錦二巻を賜つた。次で、各工場の事業を順次観覧あらせられ、途次彫刻部石版科に臨御遊ばされ、續いて畏くもキヨソーネ専用の教師室に臨ませ

給ひ、キヨソーネ彫鐫の事

業を天覽遊ばされ、局長親

しく御説明申し上げた。還

幸の後、局長得能良介及び

キヨソーネは宮内省に參上

し、局長は臨幸の恩榮を、

キヨソーネは恩賜の榮譽を

謝し奉つた（註八）。

しかも、續いて十一月二

十八日には英照皇太后及び

昭憲皇太后の行啓があつ

た。局長をはじめキヨソー

ネ拜謁の次第及び御巡覽の

次第は行幸の折と同様であ

つた。

而して、曩に完成せる國

立銀行紙幣一圓原版に續いて、明治十一年三月、キヨソーネの製作に

成る國立銀行紙幣五圓原版が完成した。表面上頭に菊花章を、その右

に鍛冶職を、裏面に蛭子神を配せるものである。而して此の年十月十

第二圖 キヨソーネ作 國立銀行紙幣

エドアルド・キヨソーネに就て

八日、獨逸に於て製作せる新紙幣に代るべき政府紙幣の一なる壹圓原  
版が完成した。此の紙幣の圖案の大要は、表面中央に菊花章を記し、  
其の右側に桂の枝を畫いて名譽を象徴し、左側に櫻の枝を畫いて威權  
の意を示し、併せて邦家の安寧堅固を祝し、上に九星を表して幾内七

道及北海道の九道に象り、

星中に大日本帝國政府紙

幣の文字を記し、右に大

きく神功皇后の尊像を描

いたものである。而して、

吾が國に於て紙幣に肖像

を採用したのは是を以て

嚆矢とするが、キヨソー

ネは神功皇后の尊像の描

寫、鐫刻に苦心したばか

りでなく、其の細部の紋

様に於ても、盡大なる努

力を拂ひ、遂に美事なる

紙幣を完成したのである。

第三圖 キヨソーネ作 政府紙幣

茲に於て、從來の官札及び獨逸に委囑せる新紙幣が、何れも贋造を防

止し得なかつたのに比して、此の紙幣の出現に依つて、此の弊を一掃

すると共に、政府紙幣の價值を認識せしむるに至つた。

而して、此の年キヨソーネは勳章年金之證の原版を完成した。因に

二三

此の年十二月紙幣局の名稱を印刷局と改稱した。

明治十二年三月、豫てキヨソーネの鑄刻に依つて製作中の贈右大臣大久保利通の銅版肖像畫の印刷が完成した。是はキヨソーネが製作せる明治四功臣肖像版畫の最初の作品である。彼は是にメソチンタ式の彫鑄法を用ひ、初めて吾國に此の手法を紹介した。

(註一) 「得能良介君傳」 所載エドアルド・キヨソーネ小傳に據る。

(註二) 右小傳に來朝の時年齒方に四十歳とあれども四十三歳を正しとす。

(註三) 印刷局沿革録(明治四十年印刷局刊) 印刷工場彫刻の章に據る。

(註四) 「得能良介君傳」 所載エドアルド・キヨソーネ小傳に據る。因に、初めの月額報酬四百五拾四圓七拾壹錢八厘は當時の百磅に相當す。

(註五) Charles Pollard 明治七年梅村翠山の彫刻會社に招聘さる。偶々シーボルト像の印刷に依り其の技を認められ、九年二月紙幣寮に備せられ、十一年一月に至る。吾が石版術の發達に貢献するところ大なり。

(註六) 印刷局沿革録及び植端雪湖氏著「日本郵便切手史論」に據る。

(註七) 得能良介君傳に據る。

(註八) 印刷局沿革録及び得能良介君傳に據る。

#### 四

なほ此の明治十二年にはキヨソーネの事蹟中に一つの特色を與へる事があつた。それは彼が印刷局長得能良介に同行、關東、中部、近畿の一府十二縣、日程四箇月半に餘る美術の調査旅行を行つてゐることである。もと此の調査旅行は、吾が日本美術を愛好せるキヨソーネが、

國寶とすべき古美術品の漫りに海外に流出し行くを憂へ、得能局長に建言せることに動機を發してゐる(註一)。而も、得能良介はキヨソーネをして、吾が美術に精通して諸種の製作の根源たらしめ、又吾が山川、風俗に親しましめんが爲に、特に一行中に加へたのであつた。得能良介は其の「巡回日記」(註二)の中に、特にキヨソーネを同行せる意義を自ら彼に語つてゐる。即ち

夜來ヨリ雨フリ、今朝ニ至リテ歇マズ。八王子驛ニ滞留シ、近傍ノ機織女工ヲ覽ル。其ノ進歩ヲ賞シテ旋ル。雨中事ナク、「キヨソーネ」氏ト對座閑話ス。予曰ク、凡ソ畫ヲ造リ、圖ヲ製スルニ實境ノ趣味ヲ解セズシテ徒ラニ形似ヲ論セバ、恐ラクハ筆ヲ枉グルノ憾ナキコト能ハズ。石樓、瓦屋ノ重疊タル必シモ歐洲ノ光景タラズ。峰巒ノ起伏シ、雲烟ノ搖曳スル必シモ支那ノ景色タラス。要スルニ、精神ヲ皮相ノ外ニ得テ、始テ與ニ畫ヲ言フベキ耳。今君我山川ヲ跋涉シ、我神社、佛閣、官民秘藏ノ古器、古畫ヲ觀、人情風俗ノ如何ヲ審ニセバ、他日筆ヲ執ルニ當テ、必ズ大ニ覺悟スル所ノモノアラン。余ノ此ノ行君ヲ伴フハ、其意實ニ此ニ在ルナリ。氏首肯シテ謝ス。

而して、此の行に隨行せる者キヨソーネをはじめ、五等屬七條平六、御用掛吉田賢輔、監工町田直吉、寫真技師三枝守富、譯官成瀬常一、古器物鑑定樋口光義等十二名であつた。

五月一日東京を出發せる一行は、先づ府中、八王子を経て山梨縣に入り、五月七日甲府に到着、數日滞在して同地方の古美術、什器等を調査し或は寫眞に撮影した。十二日甲府を出發、途に富士川の舟便を利用して興津に至り、十四日静岡に入り、次で濱松、岡崎を経て十九日



名古屋に到着した。興津、静岡に於ては、清見寺、久能山東照宮等の寶物を、名古屋に於ては博物館、名古屋城、徳川邸、東本願寺、熱田宮の古美術品を調査或は模寫、撮影した。キョソーネ等の一行六名は、特に、瀬戸村及び赤津村に至つて陶磁器製造に就いて調査した。斯くて、二十四日名古屋を出發、四日市、津、松坂を経て神都山田に入つた。此處に於ては、皇大神宮の古器、什物を調査模寫し、又皇大神宮の建築、五十鈴川、二見浦等の風景を寫眞にした。

而して、五月三十日山田を出發、伊賀街道を経て奈良縣に入り、長谷寺を訪ひ、六月二日奈良市に入つた。恰も、内務大書記官町田久成（註三）が勅封開扉の命を受けて奈良に在り、正倉院を初め、諸社寺の調査に多大の便宜を得た。即ち、彼等は數次に互つて正倉院の御物を調査し、其の尤品に就ては或は模寫し、或は寫眞に收めた。此の間、東大寺をはじめ、春日神社、西大寺、唐招提寺、藥師寺及法隆寺等の奈良市及び近郊の古社寺を訪ね、六月十八日神武天皇御陵を拜し、續いて談山神社に詣で、吉野山に登り、金峰神社を調査、續いて二十三日高野山に登つた。金剛峯寺の古美術品を調査撮影したる彼等は、舟を以て紀伊川を下り、粉河寺を觀、更に下つて和歌山に至つた。和歌山に在つて縣下の社寺の什寶を調査撮影すること旬日、次いで和泉、河内に入り、仁徳天皇、履仲天皇、應神天皇の御陵を拜し、寫眞に收め、七月十七日京都に入つた。

京都に於ける調査の廣範圍なりしと、其の滞在の長期に互つたことは此の旅行中奈良に優り、凡一箇月に垂んとした。此の間相國寺、知

エドアルド・キョソーネに就て

恩院、金閣寺、高臺寺、清水寺、東寺、東本願寺、桂宮、修學院、廣隆寺、清涼寺、黃檗山萬福寺、宇治平等院等の京都及び近郊の名刹を探り、調査を遂げた。八月七日京都を出發、滋賀縣に入つた。然るに、暑熱の候に於ける長期の旅行の爲か、キョソーネは旅中微恙を得、數日を平臥して、調査巡遊を他に委ねて靜養に努めた。幸ひ旬日にして回癒し、同月十七日には大津より琵琶湖を渡つて米原に達し、次で日を重ねて關ヶ原、大垣を経て岐阜に至り、木曾路を経て八月下浣諏訪に到着した。九月に入つて、坂本、富岡、太田を経て下野に入り、同月六日栃木に達した。同月八日より數日に亙り、日光東照宮を中心として什器、風景を調査撮影し、九月十九日、此の大旅行を終つて東京に歸著した。

此の調査旅行たるや、其の規模に於て、その調査の徹底せる點に於て、後のアーネスト・フェノロサ Ernest Fenolosa や、九鬼隆一、岡倉天心等の古美術調査の先驅をなすものであると共に、キョソーネにとつて、其の生涯に於ける最大の旅行であつた。而して、古美術品の調査、模寫、撮影をはじめ、風景の撮影等に於ても彼の助言は重きをなしたと惟はれるが、キョソーネ自身の爾後の製作に得るところ甚大であつたのみならず、彼の日本美術愛好と其の理解に速度を加へたことは贅言を要しない。

而して、此の調査に於て寫眞に撮影せるもの五百十種、模寫せるもの二百二十種に上り、印刷局は是等を當時の印刷術の粹をつくして或は著色石版とし、或は寫眞石版に附して刊行した。即ち「國華餘芳」、

「朝陽閣鑒賞」、「朝陽閣帖」及び「朝陽閣集古」がそれであつて、長く美術界を益したのみならず、印刷術の發達に寄與するところ大であつた。

(註一)「得能良介君傳」に據る。

(註二) 得能良介「巡回日記」(明治二十二年刊印刷局藏版)五月三日の項。

(註三) 號石谷。鹿兒島に生る。慶應元年藩命に依り英國に留學す。明治

元年參與職を拜命、諸官を経て文部大丞、内務大書記官となる。明治九年内務省に博物館設置さるるや局長となり、現帝室博物館の基礎を確立した。後、元老院議員に擧げられしも、卒然剃髮して三井寺に入り僧正となる。明治三十年上野明王院に寂す。齡六十。

## 五

明治十三年五月、キョソノネは年來の功に依り勳四等に叙し、旭日小綬章を賜つた。此の時キョソノネ四十八歳である。

明治十四年四月、豫て彼の原畫彫鑿に依て製作中の太政大臣三條實美肖像の印刷が完成した。嚮に製作されたる贈右大臣大久保利通の肖像は銅版に依つたが、此の作品は鋼版に鑄刻された。此の年東京上野公園に於て、第二回内國勸業博覽會開催さるるや、印刷局はキョソノネの製作に成れる大久保利通肖像銅版畫をはじめ、凹版、凸版及び石版印刷品等を出品した。而して、此の年七月政府紙幣の五圓原版が完成した。

明治十五年十月、政府紙幣の拾圓原版を完成した。明治十一年完成

の同壹圓原版、明治十四年完成の同五圓原版及び茲に完成せる拾圓原版は、就れもキョソノネの意匠と鑄刻に成るものであつて、其の表面には神功皇后の尊影を描き、圖案意匠の大要は同じであるが、其の細部の紋様を異にしてゐる。此の年キョソノネは、豫て蒐集せる日本の樂器を郷國ミラノ市の萬國樂器博物館へ寄贈した。伊太利亞政府は是を謝して特製の金牌を作り、キョソノネに贈與した(註一)。

明治十六年五月、印刷局は米國ボストン府萬國博覽會へキョソノネの刻に成る銅版印刷品及び國華餘芳、貨幣精圖等を出品した。而して、此の年十二月印刷局長得能良介が長逝した。得能良介は印刷局の確立に身命を抛ち、遂に偉大なる功績をおさめたのみならずキョソノネの招聘に盡力し、彼の來朝以後は最も是を愛し、其の背後に在つて、彼の製作を庇護指導した。されば、キョソノネも彼を師父と仰ぎいたく敬慕したところである。而して、キョソノネは其の逝去に先立つて彼の肖像を描き、又其の塋域を青山墓地に定め、墓碑を建立するに際しては其の設計を擔當した。而して、此の年の作品は上述の得能良介像の外に西郷隆盛像(コンテ畫)がある。

明治十七年二月、功に依て大藏卿より七寶燒花瓶一對、同卷煙草入一個を下賜された。此の年十一月、日本銀行兌換銀券拾圓原版を完成し、其の功に依て金二百圓を下賜された。是は表面に蛭子神を配したる圖案である。續いて、明治十八年五月には、日本銀行兌換銀券百圓原版を、七月には同壹圓原版を完成した。又此の年十一月授爵用紙原版を完成した。

(一) キヨソーネ筆 西郷隆盛像

東京 侯爵 西郷從徳氏藏

(二) キヨソーネ筆 大久保利通像

東京 侯爵 大久保利武氏藏

(一) キヨソ一ネ筆 西郷從道像

東京 侯爵 西郷從德氏藏

(二) キヨソ一ネ筆 得能良介像

東京 得能良介氏藏

(一) キヨソーネ作 大久保利通像

東京 侯爵 大久保利武氏藏

(二) キヨソーネ作 三條實美像

東京 石井柏亭氏藏

(三) キヨソーネ作 岩倉具視像

東京 侯爵 木戸幸一氏藏

(四) キヨソーネ作 木戸孝允像

東京 侯爵 木戸幸一氏藏

明治十九年五月、日本美術に深き興味を有せる彼は、日本美術團體龍池會の名譽會員に推された(註二)。爾後龍池會が日本美術協會となりて後も、永く名譽會員として重きをなした。而して、此の年亦くも命を拜して、有栖川宮幟仁親王殿下の御肖像を謹寫し奉つた。

明治二十年八月、豫てキョソーネの原版に依つて製作中の故内閣顧問木戸孝允肖像の鋼版印刷が完成した。

明治二十一年一月、キョソーネは畏多くも明治天皇の御正裝並に御軍服の御尊影を謹寫し、御軍服御尊影を鋼版に彫刻すべき大命を拜した。彼は刻苦精勵、御正裝並に御軍服の御尊影を完成し奉り、又御軍服御尊影の鋼版印刷は數年を費して完成し奉つた。而して、此の年九月五日、東宮におはせし大正天皇の御尊影を謹寫すべき御下命を拜した(註三)。又十一月には、時の陸軍大臣大山巖の肖像を描いた。

此の年九月キョソーネの原畫鐫刻に成る改造日本銀行兌換銀券五圓原版が完成した。是は表面に菅原道眞を配し、其の圖案は殊に意を用ひ、人物の衣冠服飾は古書に徴し、又帝室博物館の圖書類を参照した(註四)。次いで、十二月には改造日本銀行兌換銀券壹圓原版を完成した。是は表面に武内宿禰の像を表したるものである。此の紙幣は僅かに日本數字を亞刺比亞數字に改めたるのみにて、圖案は其の儘現在に至るまで使用されてゐる。

明治二十二年六月三條實美の肖像(コンテ畫)を描いた。八月には、改造日本銀行兌換銀券拾圓原版を完成した。是は表に和氣清麿像を配したるものである。而して、十二月には彼の原畫に依る贈太政大臣岩

倉具視の肖像鋼版畫が成つた。

明治二十三年三月、改正勳記用紙原版を完成した。而して、三月より東京上野公園に於て開催されたる第三回内國勸業博覽會へ曩に完成したる岩倉具視及び木戸孝允の鋼版肖像畫が出品された。又此の月キョソーネは、創立後間もなき吾が國最初の洋畫團體明治美術會の賛助會員に擧げられた(註五)。

明治二十四年七月九日改造日本銀行兌換銀券百圓原版を完成した。是は、表面に藤原鎌足像を配したものである。而して、キョソーネは是を公的行蹟の最後とし、十七年の長きに互つて奉職せる印刷局の雇を解かれた。これより曩七月六日多年の功勞を嘉せられ、勳三等瑞寶章を賜ると共に、宮内省御用掛を仰付けられ、年金千貳百圓を下賜されることとなつた。又大藏省よりは、特に慰勞のため金參千圓及び大和錦二卷を贈與された。時に齡五十九歳である。

(註一) 讀賣新聞明治十五年八月十五日號。

(註二) 龍池會報告第十四號。

(註三) 大正天皇實錄の編纂にあたりし武田勝藏氏の謹話による。

(註四) 印刷局沿革錄。

(註五) 明治美術會第五回報告。